

高齢者心理臨床における「老い」に関する研究

Research of Clinical Psychology in elderly people on “Aging”

研究代表者：西田 麻衣子 (D3)

指導教員：大山 泰宏

研究分担者：笹倉 尚子 (D3)・高橋 紗也子 (M2)

〔研究目的〕

我々は高齢者を対象とした心理実践とケース・カンファレンスを通して、この領域における知見を重ねてきた。そこで議論となった問題の一つに、セラピスト自身が老いる存在であることをどのように捉えるかということがあげられる。この問題はセラピストとクライアントがいかなる関係を築くかにも大きく影響すると考えられた。そこで我々は老いというテーマを取り上げ、多角的にとらえ直すことを通して、知見を深めることを目的とし、研究を行うことにした。そして、このようにして得られた知見を通して、高齢者心理臨床にも還元したいと考えた。

〔研究経過〕

本年度の主な活動は「a. ケース・カンファレンス」「b. 研究」の2点である。

a. ケース・カンファレンス

a-1) ヘルメス研究所におけるケース・カンファレンス (2009年6月6日)

ヘルメス研究所を訪問し、京都大学名誉教授、浜松大学大学院教授の山中康裕先生にご指導をいただき、高齢者を対象とした心理実践についてケース・カンファレンスを行った。個別事例の検討をふまえ、高齢者心理臨床における心理臨床家の専門性についても検討を行った。

a-2) 浦野エイミ先生を招いてのケース・カンファレンス (2009年9月5日)

臨床心理士の浦野エイミ先生を京都大学に招いてケース・カンファレンスを行った。ケース・カンファレンスには大山泰宏先生にも参加いただいた。個別事例を通して、老いのテーマを心理臨床の立場からどうとらえるかについてディスカッションを行った。

b. 研究

大学生を対象に、老いをどのように体験し捉えているのかに関して質問紙および半構

造化面接を用いて研究を行った。

b-1) 質問紙による研究

質問紙による研究では、他者との関係の中で個別的な意味をもった老いの物語が表現されていた。例えば、母親など重要な他者との関係の中で“自分の成長の引き替えとしての親の老い”として捉える語りがみられたり、また自分との関係の中では“宇宙の次元での根源的振動”として宇宙の次元から自らの老いを捉えようと試みる人たちもいた。さらに老いの意識は死といった有限性に対する姿勢や態度にかかわるものであり、限られた時間の中で自分がどのように生きていくかという心理臨床と関わるテーマであることが調査からも明らかとなった。

b-2) 半構造化面接による研究

半構造化面接による研究では、描画や箱庭を通して、老いとのつながりやへだたりといった表現がみられたように思われた。そしてこのようなつながりやへだたりは、強弱はあるにしろ各人それぞれがもっているものであり、青年期の人々はこの両義的な心理的距離を揺れながら老いを生きているのではないだろうかと考えた。

〔研究成果〕

1) 第 28 回日本心理臨床学会での二つのポスター発表 (2009 年 9 月 21 日)

質問紙による研究の成果を第 28 回日本心理臨床学会において二つのポスター発表『青年期における老い (その 1) - エピソードについての分析から』『青年期における老い (その 2) - イメージについての分析から』を行った。

2) 第 23 回日本箱庭療法学会での口頭発表 (2009 年 11 月 15 日)

半構造化面接による研究の成果を第 23 回日本箱庭療法学会において口頭発表『青年期における老い』を行った。

3) 高齢者心理臨床における「老い」に関する検討

上記の研究から得られた知見をもとに、高齢者心理臨床における「老い」に関する検討を行った。

高齢者を対象とする心理臨床では、老いや死といった不可避かつ根源的なテーマが扱われることが多い。このようなテーマと接することはセラピストの内的体験を揺り動かし、セラピストがそれに対して無自覚であることはクライエントーセラピスト関係に危険性をもたらす可能性がある。例えば、セラピストの老いへの不安や恐怖が必要以上に大きくなったり、安易な否認につながる場合があるかもしれない。だからこそ、セラピストは自らの老いに対する態度を自覚することが必要であるといえる。本研究から得られた知見は、老いへの態度を考える手がかりのひとつとして、高齢者心理臨床に寄与できるのではないだろうか。